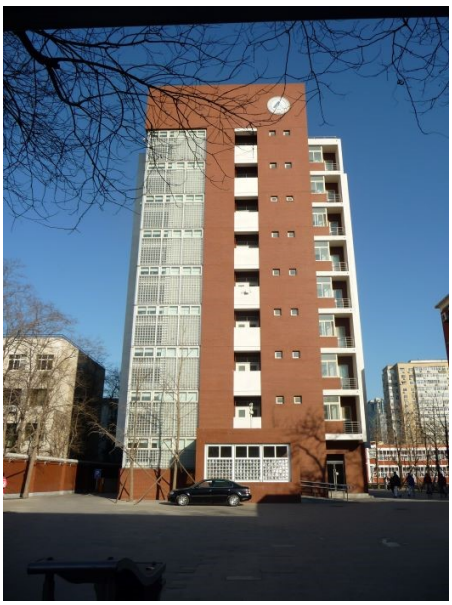
第三章　学生生活

ところ変われば品変わるといっことで、中国の大学生の生活は日本の学生生活と大きく違っている。北京大学と清華大学での学生生活について、具体的に見てみたい。

１．入試

重点高校

大学生の学生生活を述べる前に、高校（中国では高級中学あるいは中学と呼ぶ）生活についても少し触れる。有力大学を目指して高校時代に必死に勉強するのは、他の国と同様である。中国の場合、高校がランク付けされており、北京大学や清華大学を目指す生徒は、まず各省や各市にある重点高校に入学をし、そこで必死に勉強する。



中国人民大学附属中学の校舎

重点高校に入るため、受験生を抱える親はその学区に引っ越すことも辞さない。昔の孟母三遷である。日本でも高校の入学試験が小学区制であった際、「寄留」と呼ぶ慣行が横行したことがあった。これは、入りたい高校の学区に住んでいる親戚や友人に受験生を預けるもので（住民表だけ移す例もあった）、受験戦争の弊害とも言われた。その後、日本では公立高校が大学区制を採用するところが多くなり、また、学区に係らない有名私立受験高

校が増加したため、現在は余り社会問題となっていない。中国の場合、単に受験生だけではなく、家族みんなで移り住むというから大変である。

前ページの写真は、北京市内にある中国人民大学付属中学の建物である。中国人民大学自身も文科系の大学としては超難関校であるが、やはり北京大学や清華大学には及ばない。逆に北京大学や清華大学も付属中学を有しているが、受験で中国人民大学付属中学に及ばない。

ひたすら勉強

昔は進学率が非常に低く、トップエリートしか大学には進学しなかったが、現在はおおよそ三割の生徒が大学を目指すため、北京大学や清華大学入学は大変な激戦である。一流大学を目指す生徒は、重点高校に入り、後述する「高考」での高得点を目指し、ひたすら勉強に励む。日本で活発に行われているクラブ活動や、韓国でフェリー沈没事故に巻き込まれてしまった修学旅行なども中国ではほとんどなく、正規の授業と夜や土日に行われる補充授業に精を出す。

「高考」

大学入学を目指す高校生は、「高考（ガオカオ）」を受験し、その結果に基づいて希望する大学の学部を決めて大学側との調整をし、最終的に合格が決まる。高考とは、「普通高等学校招生全国統一考試」の通称で、全国大学入試統一テストである。ここで、「普通高等学校」というのは日本でいう四年制大学の総称である。前にも述べたが、個々の大学名としては北京大学や清華大学など「大学」と称するが、大学全体の総称は「高校」ないしは「高等学校」となっている。

歴代中国王朝における高級官吏登用試験として科挙制度があり、唐の時代に始まり清まで 1300 年にわたって続いてきたが、1905 年にこれが廃止された。その後、中国においても人材養成機関として大学の設立が続いたが、入学試験は各大学でばらばらに実施されていた。共産党政権樹立後の 1952 年に、公平性の確保の観点から「全国統一高等学校招生制度」が実施されたのが、この高考の前身である。当時の大学生は極めて少数のため大変なエリートであり、また、大学への入学は高級官吏への出発点とも考えられたため、この招生制度はかつての科挙の後継制度と見なされることとなった。文革が始まった 1966 年に中断され、先に見たように鄧小平の号令により 1977 年に大学入試が再開されたが、その際の名称が「普通高等学校招生全国統一考試」であり、略称として高考と呼ばれるようになった。

現在の高考は、教育部（日本の文部科学省に相当、第六章参照）入試センターと各省・直轄市（「直轄市」は最高位にある都市で省と同格の行政区画であり、具体的には北京市、天津市、上海市、重慶市の 4 市）の入試委員会が共同で管理運営しており、毎年 6 月に実施される。

21 世紀に入ってからの経済発展に伴い、大学への進学率は飛躍的に向上しており、現在は 1,000 万人を超える生徒が高考を受験するため、一種の国民的な行事となっている。試験科目は省・直轄市によって若干異なるが、基本的に国語、数学、外国語の三科目が必須科目で、文科総合あるいは理科総合のいずれかを選択する。したがって、大学に入学したい高校生は、まず理科系か文科系かを決めて、高考の試験科目に従って勉強する。

高考の成績で志望校や学科を選定

高考の試験結果が受験生に通知されると、受験生は予め公表されている各大学の学科の合格最低点と自分の成績を付き合わせ、希望校をリストアップしていく。中国では大学が大きくランク付けされており、例えば北京大学、清華大学、上海交通大学など国内トップレベル大学をいくつか順位をつけて選ぶ。次にその次のランクの大学をいくつか順位をつけて選ぶ。この場合、最初のトップ大学から 例えば北京大学と清華大学の両方を順位を付けて選ぶことが出来るが、大学側は面子から自分の大学を他の大学の後に選択した受験生を合格させることはほとんどないため、結果としてトップレベル大学は一校しか意味がない。その次のランクも同様である。

また、同じ北京大学でも学科によって合格最低点が違っているため、例えば物理学科には入れないが、化学科には入れるといったことがありうる。この場合、 受験生は入りたい学科を変更して北京大学に入るか、物理学科にこだわって他の大学に入るかの選択を迫られることになる。高考を経験した中国人に聞くと、ほとんどの受験生は高校時代にはそれ程明確に志望する学科は持たず、どの大学に入るかで決めているという。

さらに、受験生の出身地でも違ってくる。中国では農村戸籍と都市戸籍が峻別されている。このため北京市にある北京大学や清華大学は、都市戸籍を持つ受験生にはやや甘く、農村戸籍となる地方の出身者には厳しくなっており、それぞれの出身省・直轄市ごとに合格最低点が違う。これも考慮して、希望の学部学科を決定する必要がある。

大学側からの働きかけ

日本では考えられないシステムとして、大学側からの強力な勧誘がある。高考の結果が出ると、大学側では各省・直轄市ごとにそれぞれ職員数名からなるチームを作り、一般には公開されないが大学側には通知される各省・直轄市の受験結果リストを元に、電話による勧誘活動を行う。つまり、電話で本人に例えば「あなたの成績であれば、〇〇大学電気工学科で入学を許可できる」といった形で勧誘するのである。これによって希望校や希望学科の変更となる受験生も出る。高考で良い点数を取った生徒を他の大学より少しでも多く取ることが自分の大学の将来を決めるということで、各大学とも必死なのである。

現役優先の受験生

日本では、特定の大学や特定の学科に入学するため、一年や二年の浪人生活を送る受験生も多い。中国でも高考が一発試験であるということから、病気であったり調子が悪かったりして、志望する大学に入れない受験生も出てくる。

しかし、その後の浪人生活は日本とだいぶ違う。日本では予備校に入り受験勉強をして次の年の受験を目指すが、中国では予備校がほとんど存在せず、浪人する場合には高校に戻って受験勉強をする。高校四年生の扱いである。受験生全体の 2 割程度は浪人生であるという。

もう一つ違うことは、高考での浪人生の扱いである。現役の高校生に比べて、ペナルティが課せられ、例えば北京大学のある学科の合格最低点が 600 点とすると、浪人生は 610 点が最低点となる。 受験勉強を一年余計にしているのであるから、ペナルティは当然ということであろうか。

北京大学と清華大学への極端な偏り

高考での選抜は、優秀な学生がどうしても有力校に偏る。次表をご覧いただきたいが、2013 年の各省・直轄市の高考で、各試験科目の首席となった生徒が、最終的にどの大学に入学したかを示すものである。タイトルに「状元」とあるが、状元というのは清までの高級官吏選抜試験である科挙の最終試験で第一等の成績を収めた者に与えられる称号で、これを高考に転用している。なお現代の高考状元は毎年数百人単位で出るが、かつての科挙では、およそ 1,300 年の間に状元となった者はわずかに約 550 名であった。

表 3－1　2013 年高考状元入学者数の大学ランキング

順位	大学名	状元数
1	北京大学	482
2	清華大学	403
3	香港大学	42
4	復旦大学	20
5	香港中文大学	13
6	香港科技大学	10
7	中国人民大学	6
8	上海交通大学	5

（出典）中国校友会 HP

この表を見ると、いかに北京大学と清華大学が突出しているかが分かる。香港の 3 大学が健闘しているが、それでも一番多い香港大学で、両大学と比較して 10 分の 1 程度である。また、香港の場合には、一国二制度が依然として維持されており、欧米への留学も身近

であることから、中国本土の大学とは違うと考えるべきである。なお、この表には 8 位までしか掲載されていないが、それ以降の大学数は状元数 1 名という大学も含めても 11 校しかない。

大学独自の選抜

以上は高考による選抜システムであるが、北京大学や清華大学など中国のトップレベル大学では、高考以外のシステムで入学が許可される生徒が存在する。例えば、清華大学では、入学する生徒の 80%が高考による選抜で、20%が高考以外の選抜による。

日本の推薦入学に当たる制度が「保送生」の制度である。どのような基準で保送生を選び、各大学がその基準で誰を入学させたかが、一覧表として HP 上に公表されている。基準としては、各省・直轄市の中から選定した重点高校で極めて優秀な成績の生徒、国際科学オリンピックで優秀な成績を上げた生徒、語学関係の高校で優秀な成績の生徒となっている。各大学は、高考が実施される前年の 11 月に、各高校からこの基準に合致する生徒の申請を受け付け、12 月には面接などを実施して合否を決定する。北京大学も清華大学も毎年 500 名前後の保送生を入学させている。

保送生として入学できなくても、大学の自主選抜という制度で、高考前に合格が決定する生徒もいる。高考の前の 3 月に、各大学は独自のテストと面接により合格者を決定する。北京大学や清華大学では、この自主選抜による合格者は 200 名程度存在する。自分の所属する高校が保送生の重点高校ではなく、それでも自分が優秀であると考えた場合には、この制度を利用することになる。もちろん重点高校の生徒でも受験資格はある。また、夏に全国から高校生を集めて有料でサマースクールを開く大学もあり、このサマースクールで優秀な成績を収めた生徒は、自主選抜の受験資格を得ることが出来る。北京大学の場合、全国から 150 名の生徒をサマースクールに集め、そのうちの成績優秀者 40 名に翌年の自主選抜の受験資格を与えている。このサマースクールの授業料は、 2,000 元（約 3.5 万円）である。清華大学でも同様のシステムが取られている。

高考で優秀な成績を収めた生徒を出来るだけ多く取ることが、大学側として重要であるが、他方一発勝負のため高考当日に十分に実力が発揮できなかった優秀な生徒もいると考え、高考以外の選抜にも力を入れ始めているといえよう。

２． 勉学

学費

現在の北京大学や清華大学の授業料は、年間で 5,000 元（約 8 万円）である。大学進学率が極めて低かった時代には学費が免除されていたが、大学数や学生数が増加するとともに全ての費用を国や地方政府が賄いきれなくなったため、有料化に踏み切った。

他の国の大学における授業料と比較すると、日本の国立大学の授業料は年間約 60 万円、私立大学が約 120 万円となっている。また、米国の一流私立大学は約 300 万円前後の場合が多い。したがって、先進国の大学の学費と比較して低いレベルに押さえられており、北京などの都市部の中産階級の子弟にとってはそれ程重い負担ではない。ただ、所得格差のある地方出身者にとっては重い場合も想定され、北京大学や清華大学ではこれらの学生に対する奨学金制度を充実させている。

さらに、理科系の博士課程に進む大学院生の場合、奨学金や所属研究室からの援助で、授業料を払 っていない場合がほとんどである。

授業のサイクル

中国の大学では、一般に前期・後期の 2 学期制を採用しており、9 月に新学期が開始され、翌年の春節（旧暦の正月）前に休暇に入り、春節後に後期の学期が開始される。6 月に後期試験が行われて休みに入り、卒業時期は 7 月末である。学部教育は 4 年制（医学部等の専攻によって 5 年制の場合もある）で、学業成績が極めて優秀な学生に飛び級が認められる。

月曜日から金曜日までが授業であり、土曜日曜は休日である。授業のある日は朝 8 時半から始まり、1 コマ 1 時間半の授業が午前 2 回、午後 2 回ある。

受験生並みの勉学

日本の場合、 大学に入ると後は卒業まで一種のモラトリアム状況にあると考え、部活やアルバイトに精を出す学生が多いが、中国では全く違う。北京大学や清華大学に入れば、中国ではトップエリートと思われるが、それだけでは人口の多い中国で勝ち抜けるとは限らない。ほとんどの学生は、より良い職場、より良い処遇を目指して、さらに激烈な競争を展開する。その場合、学業成績が全てであるので、中国の大学生は受験生並みの勉強を継続している。

勉学の場～図書館と空き教室

中国の学生は学生寮の自室は勉学をする場と考えておらず、ほとんどの学生は自室以外の場所で宿題などの勉学に励む。最も人気のあるのが図書館である。北京は大陸性の気候である。夏は暑く、冬は寒い。その期間も長い。このため、エアコンの効いた図書館は勉学に最適であり、朝 7 時の開館前に学生の長い行列が出来る。図書館は夜 10 時まで開館している。

壮麗な北京大学図書館の外観

熱心に勉学に励む清華大学図書館利用者

授業で使っていない空き教室を大学側が学生に開放しており、この空き教室も勉学の場として人気がある。どうしても見つからない場合には、キャンパス内外の喫茶室を利用することもあるが、料金がかかるため、しょっちゅうというわけにはいかない。

英語の学習

北京大学や清華大学の学生は、それぞれの大学で良い成績で卒業しようと猛勉強するが、それに併せて英語の勉強にも余念がない。学部を卒業した後、或いは修士や博士を取得した後、米国などの欧米主要国の大学に留学やポスドク（博士研究員）修行に出かけるためである。

最近、英語を勉強する大学生に人気の英語塾がある。「新東方」という会社が経営している英語塾であり、新東方はニューヨーク株式市場に上場している。新東方の経営責任者の俞敏洪（ゆびんこう）は 1962 年生まれで、北京大学を卒業後母校で教鞭を取っていたが、

退職し 1993 年に新東方を設立している。北京大学に入る際には、高考を 3 度受験しており、日本的にいうと 2 浪で合格したのである。新東方は企業として大成功を収めており、中国全土の 48 都市に 500 ヵ所に上るラーニングセンターを有している。2011 年までの統計で、1,500 万人の学生生徒を教えたという。

北京大学や清華大学の学生は、留学を夢見て新東方が経営するラーニングセンターに通う。センターには子供から成人まで色々な生徒が通うが、大学生は、米国の大学や大学院の共通テストとなっている TOEFL や GRE のコースを受講する。コースの授業料は全体で 3,000 元 （5 万円）程度という。

３． 日常生活

学生寮

中国は広く、また近年まで公共交通がそれ程発達していなかった。このため、ほとんどの大学の学生は、大学所有の学生寮に住むことが前提となっている。これは北京のような大都会にある北京大学や清華大学でも例外ではなく、大学の近辺に住むごく一部の人を除き、ほとんど全ての学生は学生寮で生活している。

清華大学学部生の学生寮

実家が比較的近くても学生寮に住む理由としては、利用料の安さもある。例えば北京大学では、古い寮で年間 750 元（約 13,000 円）、新しい寮で 1,020 元（約 17,000 円）に過ぎない（2014 年 5 月現在、電気料は寮生の自己負担）。ただし、留学生はゲスト扱いとなり、約 10 倍の利用料を払うことになる。

学部学生は 4 人部屋であり、修士学生は 3 人部屋、博士学生は男性が 2 人部屋、女性が 1 人部屋である。利用料は全て同一である。

部屋にはベッドと机が一体となったものが置いてある場合が多く、4 人部屋などの場合、カーテンで仕切って個室的に住んでいる。部屋自体は簡素なものであり、ガスや水道がないため、自室での炊事は出来ない。電話は自前の携帯電話であり、テレビも持っていない寮生が多くパソコンやタブレット端末でテレビ番組を楽しむ。シャワー室や洗濯機室などはフロアー全体での共用である。

多くの学生は、学生寮の自室で勉強することはほとんどなく、睡眠などの休養が中心である。

食堂

寮の自室での炊事が出来ず、外部のレストランは比較的遠いため、学生は朝昼晩の三食をキャンパス内にある食堂で取るのが原則である。数万の学生が三食利用するため食堂の数は多く、北京大学で見ると 8 カ所にある。

清華大学内の学生食堂

それぞれの食堂では、一階が学生用、二階が教員やゲスト用になっているものが多い。ゲスト専用の比較的高級なレストランもある。

学生はプリペイドカードを持ち、カフェテリア形式の食堂で好みのものを注文する。朝食はおかゆや肉まんなどが人気であり、一食 3～5 元（50～90 円）である。昼食・夕食は普通の中華料理の単品や麺などが並び、一食 10 元（170 円）程度である。ビールなどのアルコールも注文できるが、一階の学生用食堂ではほとんど飲まない。

教官は一階の学生用の食堂も利用できるが、多くの場合、二階のより高級な場所で食事をする。それでも平均 20～30 元（350～500 円）程度である。また、誕生日などのお祝いの際には、学生も二階の高級な食堂を利用し、その場合にはアルコールを注文したりする。

売店

売店もキャンパス内にあり、文房具、お菓子、飲み物、T シャツや下着などの簡単な衣類、運動靴、かばんなどを販売している。本屋もあり、教科書を販売している。そのほか郵便局、銀行、変わったところではキャンパス内で移動に便利な自転車を修理をする店などもある。

清華大学内の売店（生鮮食品はない）

学生が病気にかかった場合には、売店内の薬局で薬を買って直すが、より重い場合には、キャンパス内にあるクリニックで医師の診察を受ける。

娯楽

部活もアルバイトもなく、親元から離れて寮生活となると、ほとんど娯楽というものがない状態での学生生活であるが、そこは若者であり、土日には時々はめを外すこともある。いつも食事はキャンパス内の学生食堂であるので、たまには学生同士でキャンパス外のレストランに出かけ、その後カラオケに興じたりする。料金は、高くても一人当たり 100 元（1,700 円）程度で、学生同士では割り勘が原則という。

カップルが連れ立って歩いていたり、寄り添って座っていたりする光景を両大学のキャンパスでも見かけるが、こういったカップルでのウィンドーショッピングも人気であるという。また仲間同士が連れ立って、北京市内や近郊への小旅行に行くことも楽しみの一つである。

４．課外活動、インター―ンシップ、ボランティア

課外活動

日本や欧米の大学では部活動が盛んである。日本の最高学府である東京大学でも、 例えばボート部は全国の大学でも最強の部類に入るし、野球部は最近連敗を続けているが将来プロ野球選手となる人材を多く有する他の東京六大学のチームとそれなりに戦っている。米国でも、ハーバード大学やイェール大学などが属する「アイビーリーグ」は、アメリカンフツトボールのチームのリーグが転じて米国北東部の有名私立大学の連盟となったものであるし、英国ケンブリッジ大学とオックスフォード大学は、毎年春にロンドンのテムズ川でレガッタ競争を繰り広げている。

しかし、北京大学や清華大学のような中国のトップ大学では、学生は勉学が本分であり、欧米や日本の大学のように部活動に精を出すことは考えられない。

体育会系の活動のようなハードで高度なものでなくても、日本の学生はサークル活動として運動や文化活動にのめり込む学生も多いが、中国の場合はこのようなサークル活動も少ない。中国の大学では、休日となる土日に友人で集まり、テニス、バスケットボールやミニサッカーなどを楽しむ程度である。なお日本でポピュラーな野球は、中国ではほとんど行われていない。

インターンシップとボランティア活動

部活動やサークル活動を余りやらず、ひたすら勉学に励む中国のトップ大学生であるが、インターンシップとボランティア活動には熱心である。インターンシップというのは、 夏休みの期間などを利用して中国の有力企業が会社のオフィスや工場に学生を招聘し、実地の教育を施すものである。会社側としては授業の側面援助と称しつつ、実際は良い学生に目星を付けて、将来自社に就職させることを考えている。一方、学生側は実地の教育を受けるとともに、あわよくば就職が内定することを期待している。

もう一つ熱心なのは、ボランティア活動である。四川大地震などが起こった際、学生は大挙して現地に赴き、様々な活動を実施している。北京大学や清華大学の大学当局がこのボランティア活動の重要性を認識し、これを実践する学生に高い評価を与えるためといわれているが、それでもボランティア活動に専念することは大変良いことである。

なお、北京大学や清華大学の学生ではないが、高考で失敗するなど様々な理由で両大学に入れなかったが、意欲を持って勉学して他の大学で優秀な学業を修めた学生は、修士課程や博士課程でもう一度北京大学や清華大学を目指す。その際、両大学とも夏季休暇中にサマーキャンプを行って、全国から学生を集めて教育を行い、その中からこれはと思う学生に注目する。こういった活動も両大学で行われている。